九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

京城だより③ 『林芙美子全集』未収録資料紹介 : ヨーロッパから帰国後の作品活動を中心に

嚴, 基權
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/25420

出版情報 : 九大日文. 19, pp.73-89, 2012-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

KYUSHU UNIVERSITY

京城だより③

『林芙美子全集』未収録資料紹介

――ヨーロッパから帰国後の作品活動を中心に――

嚴 基權 EOM Kikwon

はじめに

今回は「京城日報」に収録されている林芙美子関連の資料を取り上げる。「京城日報」に掲載された時間順に並べると、「文壇噂ばなし」（昭和六年一一月二一日）、「林芙美子の小説・雑感（文学の一意見書）」（昭和六年一二月二〇、二二日）、「靄」（昭和八年一月一二、一三、一四日）、「文学雑感」（昭和一一年七月一七日）の四点である。その中で林芙美子作は「靄」と「文学雑感」の二編である。特に「靄」という作品は『林芙美子全集』未収録で今まで研究書などにその書誌情報が見受けられなかった三回連載の短編小説である。そのあらすじは次のとおりである。某学院に通っている葦野という学生の寮に遊びに行った路子と正子がその帰りに靄の中で葦野から驚かされる。その際正子は始めて葦野を男として認識してしまう。後に、三人はおでん屋に寄り、葦野が靄の晩に起きた失恋の話を聞く。靄に表象される、恋が結ばれたり結ばれなかったりするアイロニーな空間でのエピソードが中心に描かれている。「靄」の連載一回目の紙面には昭和六年に撮ったと思われる作者の顔写真が一葉、二回目には作者不明の挿絵が一葉付いているのみである。

昭和一一年に書かれた「文学雑感」は林芙美子の文学に対する姿勢や旅に出る時の心情が綴られてあり、芙美子の文学を理解するにあたって一つの手がかりになる。これまで林芙美子は「外地」、その中でも朝鮮との接点が殆ど見られなかった。だが右記二編から、芙美子が実は、朝鮮で発行されていた新聞に作品や随筆を寄せていたことが立証される。このことだけでも注目に値する資料だと言えよう。

それでは、一先ず「靄」が掲載される昭和八年頃の林芙美子の文学活動について探ってみることにしよう。

ヨーロッパから帰国後の林芙美子

昭和五年改造社から出版した『放浪記』が大ヒットし、その際の原稿料などで中国に海外旅行に出る。それから二年後の昭和六年一一月には朝鮮とシベリア経由の汽車でヨーロッパに行き、ほぼ半年後の昭和七年六月に日本に戻ってくる。ヨーロッパ滞在中にも芙美子は創作活動を続けていた。帰国後の創作活動を全集[1]の年譜から適宜抜粋すると、次のようになる。

昭和七年（一九三二）二十九歳

一月二十三日、パリからロンドンへ行く。二月二十五日、

ロンドンからパリに戻る。五月改造社山本実彦社長から旅費を借り、日本郵船榛名丸で帰国。途中、上海に立ち寄り、魯迅に会い、「杏義山」の詩の色紙を貰う。六月十六日、欧州旅行から帰国。八月二日より十六日、戸隠へ行く。二十六日、下落合四丁目二一三三番地の和洋式の洋館を借り転居（家賃五〇円）。以後十年、ここに住む。九月二十三日、義父、母商用のため上京。

2月「西伯利亜の三等列車」改造　「下駄で歩いた巴里」婦人サロン

3月「巴里の小遣い帳」婦人世界

4月「屋根裏の椅子」改造　「女性読本第一課」婦人世界　「巴里まで晴天」改造　「皆知つてゐるよ」婦人サロン　「倫敦の下宿其の他」中央公論

5月「巴里の横町」婦人サロン

6月「一瞬の欧州の旅」読売新聞（22、23、24日）　「私の見たヨーロッパ」朝日新聞（23日）

8月「男性軽蔑の意」婦人サロン　「ナポリ小景」若草　「仏蘭西の田舎」新潮

9月「彼女の控帳」新潮　「巴里案内」婦人世界　「山日記」作品

10月「小間使ひの言ひ分」婦人サロン　「独身者の風」若草　「林芙美子の青春」婦人公論　「羅天区の散歩」改造

11月「小区」中央公論　「或る大学生の記憶」三田新聞（4日）　「牡蠣を食ふ話」セルパン　「三等船室雑話」政界往来　「巴里の裸体美人」オール読物　「ひとり旅の記」日本国民　「一速の散文―銀座風景」新潮

12月「耳輪のついた馬」改造（8年1月まで連載）　「外国から日本を見る」新潮　「女性作家に寄せて」作品

昭和八年（一九三三）三十歳

三月四日、岡山の義父上京。一時同居したが、やがて近くに別居した。四月二十六日より二十九日、改造社の講演旅行で関西へ赴く。七月二十一日より因島へ行き、八月十八日帰京。この月、保高徳蔵の厚意により、第二詩集『面影』が刊行された。九月四日より十二日まで、共産党に資金寄付を約束したという疑いで中野警察署に留置される。十月二十二日、京屋にて木村毅、片岡鉄平に会う。十一月三日、義父沢井喜三郎、急性肺炎で死去。その後、実母をひきとり晩年まで一緒に暮らした。

1月「女ふところ日記」婦人世界（五月まで連載）　「空の喇八」新潮　「晩年」新女苑　「客と芸者」サンデー毎日（8日）　「リラの女達」週刊朝日（20日）

2月「私は泣かない」令女界　「洋燈の憶ひごと」サンデー毎日（19日）　「劇団東京の『桜の園』を見て」作品

3月「心の風景画」婦人世界　「燐寸と酒に寄せて」モダン日本　「もしカチュウシャであったならば」新潮　『わたしの落書』啓松堂

4月「魚の序文」文芸春秋　「散歩の苦言」国民新聞

5月「大島行き」改造　「花と暦」新潮　『三等旅行記』改造

社『放浪記・續放浪記』改造社　『清貧の書』改造社
6月「鷺」改造
7月「人形聖書」若草（12月まで連載）
8月「涼しき隠れ家」令女界　「わが身上相談」婦人公論『面影』文学クオタリィ社
9月「小さい花」新潮　「巴里の術策」モダン日本　「落合町山川記」改造
11月「紅葉の懺悔」文芸　「朝顔」文学界

日本に戻ってから「彼女の控帳」や「小区」などの作品で再び注目を浴びる。特に「小区」は今までの自伝的作品から脱皮しようとする作家の努力が見えはじめると評価される(29)。

しかし、このような創作における手法の変化は昭和八年になってもその葛藤が見られる。昭和八年四月に「文芸春秋」に書いた「魚の序文」は、好評を得ると同時にそれまでの抒情詩人のような「型」から逃れていないという厳しい評価もうける。例えば、広津和郎「文芸時評（完）」（「読売新聞」昭和八年三月三〇日）と榊山潤「文芸時評（四）」（「時事新報」昭和八年三月三一日）はそれぞれ「ぴしぴしと小魚の跳ねてゐるやうな活発さ」のある作品、「相変らず、貧乏の中にゐて慎ましく貧乏くさくない」「仄々と明るい純情の女性」の主人公の作品であると評価している。その反面、深田久弥「文芸時評②」（「東京日日新聞」昭和八年三月三一日）は「魚の序文」について「相変らず水々しい詩情に充ちた作品」で、作者の林芙美子を「賞讃する人々は、ある一つの氏の型で氏を享け入れて」いて、それを作者「自ら氏の型を模倣してゐるらしくさへ見える」とし、創作の技法の流動性を要求している。また、木村毅も「四月文壇の印象（七・完）」（「九州日報」昭和八年四月一三日）で「魚の序文」を取り上げながら、林芙美子について「相変はらずの抒情人で」「どうやら少し溺れ気味にみえる」と酷評している。後に「私の仕事」で林芙美子が自分の創作活動を振り返って「私の仕事は、放浪記時代、清貧の書時代、牡蠣時代と、三期にわけることが出来る」（「文芸」昭和一二年八月）と述べたように、昭和八年は「清貧の書時代」と「牡蠣時代」との真っ只中に位置する時期であった。このような創作技法の変更が要求された時期に「靄」という作品が書かれたのである。

それでは次に林芙美子の「靄」という短編小説を掲載する。資料の翻刻に当たり、本文表記は原則として原文に従った。特に、漢字は可能な限り原文そのままの旧字体で、仮名遣いも歴史的仮名遣い、また活字がつぶれて見えない判読不可能な文字は「■」で表記した。最後に、各資料の末尾に、掲載された日付、朝夕刊の別、掲載面数を付した。

『林芙美子全集』未収録資料

靄（一）

林　芙美子

部屋へ這入るなり、正子がいきなり男のやうなぞんざいな口

を利いた。
「うん、なか〳〵いゝ部屋だね」
「晝間だととてもいゝンだけど…こゝずつと麥畑ですヨ」
××學院に通つてゐる葦野が、おとなしく説明しながら、正面の硝子窓を開けた。
コツ、コツ、コツ誰かノツクする。
「葦野君、葦野君、ゐるかね」
聲がそれにつゞいた。「あゝ」とも「おゝ」ともつかぬ返事をして、葦野君が入口の扉を開けるといきなりヒヨイと、脂肪つぽい若い學生の顏が、素早くのぞいた。
「君イ、濟まないがバツトを持つてたら……」みなまで聞かずに、葦野は机の上のバツトを渡した。
顏を引込ませた學生が、入口で葦野と二言三言喋ると、朗らかな笑ひをあげた。
スリツパの音がゆつくり遠ざかつて行く。
机の前に戻つた葦野の顏には、まだ微笑の影が漂つてゐる。きつと女客が問題になつたのに違ひない。
「おともだち?」
路子が小さな聲で聞いた。遠くでパタンと扉を閉める音がする。
「えゝ、奴とても面白いんで……若い女の人が來る毎に、何とか文句をつけてはきつとのぞきに來るんですよ。そして紹介しろ、紹介しろつてね」
「アラツ、そんなにしよつちう女の方がゐらつしやるんですか?」
黙り屋の路子が眞面目顏できいたので、みんなは笑ひだしてしまつた。
「おとなしいくせに、ヒヨイ、ヒヨイと急所を突くのね、路ちやんは……」
正子が相變らず男のやうな口をきいた。
「全く、だけど、さうぢやないんですよ。この間一度、學院の女生徒が來たツきりですよ」
「ア、あのサンちやん?」
「困つちまうナ、サンちやんつて僕、實際何でもないんですがねえ葦野は熱くなりながら、いひ譯をした。
正子も路子も、サンちやんの事に就いては餘り知らなかつた。唯サンちやんと呼ばれる學院きつての茶目なひとゝ、おぼつちやんの葦野が一緒にされて、學院の生徒がからかひの種にしてゐるといふ事だけは、以前から耳にしてゐた
「それよりも、ホラ、あれ見ましたか、似てるでせう……」
机の上の電氣スタンドが、くるりと壁の一方に廻轉した。壁には薄水色の灯が縞になつて流れた。
濡れたやうな電燈の光線に、ほのかに照し出された額の中には、路子にそつくりの女の顏が、長い睫をあげてゐた。
「實際似てるねえ、あれのことを吉田君が路ちやんに似てるつて云つたのは?」
「え、さうです。友達が持つてゐたのを、僕、せがんで持つて來ちやつたんですよ」

「フウン」
正子が長いあごを突き出すやうな厭にづんどうな返事をした。
「イヤ、變に思はないで下さい。余り似てたもんだから、つひ欲しくなつて……」
「さア、その、つひ欲しくなつたそこん所の氣持なるものが、そもそも問題だわねえ」〔「京城日報」昭和八年一月一二日朝刊六面〕

(二)

「さて、僕、お送りしませう」
シインとした夜更けの寮を出ると、外は深い靄であつた。
寮の前の坂をダラダラと降りると、廣い野原だが、深い靄で一間先も見えなかつた。
「葦野さん、かへる時、淋しかない？」
「僕、僕なんか大丈夫ですよ、路ちやんみたいな弱虫と違ふ、男だもの」
「ウツ……男だものか、矢張り私は淋しいナ」
「さうですかねえ、僕はまた、正子さんみたいに肥つて、ガツチリした女は、何が出たつて恐かないだらうと思つた」
今度は誰も何とも云はない。靄が深くて、並んでゐてもお互の顔色が認めないのだ。
「どつかで水の音がするのねエ」
「橋はまだなンだらうか」
「エ、まだ野つ原を半分も來てないンですよ。ホラ、遠くにポツンと赤い灯が見えるでせう、あれが橋のたもとに立つてる電柱です」
「この邊で何か出たら恐いだらうなア」
「この向ふの山の所は、よく不良が出るんですよ。この間も何處かの若い婦人がやられたンだつていつてましたがねエ」
「だけど、あんな淋しい山の所なンか、夜中ひとりで通るなんてそれア、通るひともいけないと思ふわ」
「ウワツ！」
葦野君が急におどかしたので、路子はキヤツと叫んで小路にしやがみ込んでしまつた。
「あゝおどろいた……」
「驚いた？アハ……餘り淋しがつてゐるからちよつと驚かしてみたくなつたんですよ、さあ歩きませう、もうおどかさないから」
「よウ、しやがみ込んでるひとは置いてつちやうよ」
間もなく二人は廣い道へ出た。
「もう大丈夫だ」
「本當によかつた、町も見えるし靄だつてうすくなつたやうだわ」
「だけど葦野君もひとが惡いわア
「正子さんでも恐かつたですか？」
「恐かつたですかもないもンだ。ううん、いつもなら何でもないんだけど、なンしろ、あゝいふ深い神秘な、少々キザでもいゝや、神秘な靄の中では、何でも違つて感じられるんだわねえ、

葦野さんなんか、いつもなら私と同輩か、弟位にしか、失禮……弟位にしか思つてないンだけど、それがあゝいふ場所では大變恐いのねヱ。さア此の氣持……何と云つたらいゝか知ら。つまり男として感じるのねヱ、何よりも男と云ふものを感じるんだわ」

「さういふのを僕、何かの本で讀んだ事があつたですけれど、併し弟とは思ひ切つて云ひましたね、正子さんにあつちやア叶はない。どうです、どこかで三人で元氣をつけませんか、それとも餘りおそくなりすぎますか？」

「いゝえ、大丈夫よオ、親は四百里先だもの、下宿なんかかまうことないし、そこン所のおでん屋起きてるらしいわ」

正子が、のれんの端に手をかけて中を覗いた。

「誰かゐるやうだけど……もつと先へ行つて見ませうか」

「かまはないぢやないの、さあ這入らう、這入りませうよ」

正子の厚い肩がまつさきにのれんをくゞつた。二人も後につゞいた。〔「京城日報」昭和八年一月一三日朝刊六面〕

(三)

三四人の先客が、ドカ〳〵と歸つて行くと、土間のバンコに陣取つて居た三人も、正子の發議で座敷へ上つた。席をかへて、一度途切れた話を、亦葦野はつゞけた。

「……で、朝早く、カバンをかけた女の子が林の中を泣き通つたとか、どこまで行つても、結局話は本筋へふれて來ないんです。僕は僕でまた、あの偏質者の父が死んだら、自分の分だけ財産を貰つて放浪の旅に出るんだなぞ、およそ結婚とは縁遠い果敢なげな話を、妙に涙ぐましく話たりしたんです実際僕は、あの偏質者の父の血が僕の體内に流れてゐるんだと思ふと、結婚などは空恐ろしく思へますよ。あゝあの可憐なふみと、どうして結婚出來るものですか……ふみはまたふみで「それぢやア私達の戀はどうなるんです」といふ程強い女ぢやなかつたのですねヱさうしてゐる間に、時計は十二時近くになり、僕はつくづくとその夜の僕にとつては始めての逢曳きが、かうも淡々として味氣なく、まるで水のやうに終つてしまつた事を淋しく思ツたンですが。ふみも恐らくさう思つたのでせう。僕が靴をはいてる時、ぼんやりと敷■の上につゝ立つてゐるんです。僕は靴ベラでかゞとを滑べらしこむと、ステツキを取るために伸ばした手を、やにはに、短いスカートから寒々とのびてゐる細いふみの素足に巻きつけました。瞬間のことなので、ふみは小さな叫びと共に上體を僕の上に折り曲げて、いゝえ、決して僕は計畫的にしたンぢやありませんよ、唯、僕、耐らなくなつて、細いふみの兩足に抱きついたのです。ふみは足を抱きしめられたものだから、思はずフラフラして前へのめつただけなんです。併し、女つてあんなものですかねヱ、あれ程水のやうに靜かだつたふみが、今度はどうしても僕の胸から離れやうとはしないンですからね。十二時半を過ぎると、電車が無くなるので、僕は少しイライラして、ふみを無理に眞直ぐに立たせてやつたンです。外は今夜のやうに深い靄だツたな。兩の肩に冷たいものが輕くふりかゝるやうな、とても深々とした靄の

晩だつた。あの偏質者の父が、どんなに狂人のやうになつて、妹を困らせてゐるだらうかと思ふと僕は足が地につかぬ思ひで道を急いだンです。僕は驛の近くの林の中の小路に一歩足をふみいれた時急に横にそれた近路を思ひ出して偶々一歩足を返した時、僕は凍りついたやうに堅くなつたんですよ僕の前に人が立つてるぢやありませんか…僕は強ひて落ちついた聲をだしていつてやりました。「誰ですかツ！」

二三歩前の人影は、そつと一歩後しざりしたンですが——この寒い、しかも靄の深い夜半を、無雜作に下駄をつゝかけた、長い素足短いスカート、ふみだ！ふみだつたぢやありませんか。叫ばうとした瞬間、ふみはクルツと後を向いて、バタバタとかけだして行きました。一間も離れゝば、もうかいもく見えやしません。僕は失敗じつたと思ひながらも、すぐに驛の方の近路をどんどんと急いだンです、それ以來何といつてもふみは會つてくれません。勿論手紙を出しても返事も來ません。ふみはあの晩の思ひ出は、うすい硝子の瓶に凍りついてしまつたものゝやうに思ふのでせう。香水の好みが氣にくはぬといつて別れる女があるぢやありませんか、まして深い靄の、しかも夜更けの路を、夢中で追ひすがつたひとに、「どなたですツ」と、まごつく間抜け野郎は……いゝヱ、電車には間に合ひました。お蔭で親父には暴れられずに濟みましたが、なまじひにこんな一面があるだけに——戀なんて出來ませんね。僕みたいに優柔不斷で、目の前に追つて來た幸福に對しても、飛びつく幸が出來ず、後しざりばかりしながら、遠慮深く生きてゐると、後悔ばかりで、あゝ、全くこの事でも、口惜しいことで……」

話し終へて、隱めた葦野の微笑が淋しさうであつた。長い失戀譚に横槍も入れずに珍しく黙つてきいてゐた正子が部厚な眼鏡の玉をジユバンの赤いもみ裏で、やけにゴシゴシこすりながら、始めて口を利いた。

「なアに、あんたみたいな人は、お父さんの氣にいつたお嫁さんをさつさと貰ふんだわ、さうすると毎日會社の出勤も遲刻しないし、若萬一好きなひとを見つけたとしても、一家圓滿は間違ひつこなしに守れるわよ、あンたの人柄がねえ、此ひとはいゝ御主人様の氣風だよ」

グツ〳〵とおでんの煮えつまる音をきゝながら、葦野は正子のさした杯を、仕方なさゝうに受けて俺の話は、此女の芯には應へまいといつた風に、のれんを肩で割つて、靄をみながら、「路子さん、唄でもうたひながら行きませうかね」と、袂の底の金の音をチリチリと鳴らしてゐた。（終り）〔「京城日報」昭和八年一月一四日朝刊六面〕

「靄」というモチーフ

靄は気象学的には射程一キロメートル以上の場合を指す。「靄」という作品は「靄」の中に入ると、普段は同輩か弟くらいにしか見えなかった人が男として見え始め、恋愛の感情が芽生えたり、逆にお互いに好きな恋人同士の関係が破れてしまったりもするという内容である。普段の生活の中では感じられな

いあるいは見えにくいものが、逆に「靄」の中では見えやすくなる。林芙美子の作品にはこのような「靄」の描写はあまり見受けられないが、その中でも昭和九年四月の「文芸」に発表した「塵溜」という短編小説に類似の表現が出てくる。宮内との恋に失敗し、別れて一年も立たない内に治作と郊外の煙草屋の二階に住んでいた小なつのところに、或る日突然宮内が訪れてくる。同棲している治作にはかつての二人の関係を誤魔化して酒などを御馳走する。宮内を見送りに出掛けた小なつは宮内に対して「もはやこの男に何の魅力も感じてはいない」とも思う。しかし、二週間後に宮内から子供の出産の知らせが届いた時、小なつは「歯茎のきたない子供だろう」と嘲りながらも、一抹の淋しい靄が身体のぐるりを這いあがるような気持ちがしないでもなかった。」と心の中で思うのであった。その後特に小なつと宮内の関係の展開は見られないが、もう昔のような恋人としての感情のなくなっていた宮内から子供の出産の知らせを受けた際のこの記述は、小なつのその心境の変化が少なくとも揺らいでいると解釈できるだろう。

板垣直子は『林芙美子』（東京ライフ社、昭和三一年一月三〇日）の中で林芙美子の小説を大きく「自伝小説」と「客観小説」の二つに分けている。さらに「自伝小説」の中でも「放浪記」圏内の諸作」と「放浪記」圏外の諸作」に区分している。「塵溜」は前者の「放浪記」圏内の諸作」の一つとして数えられている。板垣直子の分類に従わなくても、林芙美子の読者なら「塵溜」の宮内から芙美子の初恋の岡野軍一を連想するだろう。尾道の女学校時代に知り合い、岡野が東京の明治大学に進学にすることになり彼を追って上京したものの、結局は岡野の家族の反対にぶつかり初恋の失敗を味わう。これからも推測できるように「靄」という短編小説に出てくる葦野という男も岡野軍一をモデルにした可能性が高いと思われる。そう考えると「靄」の最後の正子の「なアに、あんたみたいな人は、お父さんの気にいつたお嫁さんをさつさと貰ふんだわ、さうすると毎日会社の出勤も遅刻しないし、若万一好きなひとを見つけたとしても、一家円満は間違ひつこなしに守れるよ、あンたの人柄がねえ、此ひとはいゝ御主人様の気風だよ」という発言は、故郷に帰ったきり親の指示通りお見合い結婚してしまった岡野軍一に対する言葉でもあったと受け止められる。

ここでまた年譜から抜けている作品を一つ紹介しよう[3]。昭和八年正月の新春読物として林芙美子は「放浪へ」（二七日、二八日、二九日）という三回読切の作品を「読売新聞」に寄せている。これは五人の女流作家が「女」というテーマでそれぞれ作品を書いているのだが、一番バッターとして矢田津世子の「処女時代」（昭和八年一月一三日、一四日、一五日）という副題の作品を皮切りに、佐藤碧子「オフィス・ワイフ」（一七日、一八日、一九日）、大田洋子「女へ」（二〇日、二一日、二二日）、真杉静枝「愛欲」（二四日、二五日、二六日）と続く。挿絵は全作ともに新進画家の甲斐仁代が担当している。こうした「中篇連作小説」の最後を林芙美子が飾っているわけである。その内容は宵子という女を主人公にして彼女の恋愛話を軸に五人の作家がそれぞれの

話を進めている。最後の芙美子の「放浪へ」になると小説の中の時間は四年後という設定になり、『放浪記』を連想させるような恋愛に失敗した宵子が描かれている。

このように昭和八年前後の芙美子は、作家デビュー前の生活から得たモチーフの自伝的な香を強く匂わせる作品を書いていた。そのような作品は「外地」の朝鮮で発行されていた新聞にも見られたが、戦後の日本では植民地時代に「外地」の朝鮮に進出していった他の作家の作品と同じく「靄」のようにその姿を消して見えにくくなる。しかし、当時「靄」という作品がどのような経緯で「外地」の新聞に掲載されたのかは未だ定かではない。

それでは、次に林芙美子作の二点目の「文学雑感」という随筆について見てみよう。

昭和一一年頃の文壇と林芙美子

文學雜感

林　芙美子

私はこの頃は文學の仕事に對して非常に大膽でなければならないと思つてゐる。ふてぶてしく立ちはだかつて行かなければ、よい仕事は出來るものでないと考へてゐるからである。

作家の仲間では、よく純粹文學と大衆文學との岐路に迷ふといふやうな話――例へば純粹文學者にとつて大衆文學は敵であるか、生活のためには大衆向きな作品もかゝなければならないといふ苦しい妥協をしなければならないと云はれてゐるが、私はこのことにも、さういふ風に大衆文學を純粹文學と區別して考へたくないと思ふ。文學はすべて大衆的でなければならないといふ建前からいへば、それを區別するよりも、その融合點に大きな問題があり、作家の努力がそこに向けられなければならないと考へるのである。作家はつねに現實的な人間でなければならない。作家がつねに現實的に生きた人間の生活を描いてさへ行けば必ず、大衆文學とか、純粹文學とかの區別を越えた生きた文學が生み出されるのではないだらうか

ところで、かう考へて來ると、私は現代の文學者の生活的な狹少さを、沁々と考へさせずにはおられない。殊に純文學を死守するといつた氣概の、若い同人雜誌の作家を考へて見るとき、勿論その純粹文學を死守するといつた態度は大變立派だけれども、そこには理想といふものがなく、同人雜誌の世界だけを見まはして、狹量に生活してゐるのを見ると、これが日本の文學を大きく發展させない癌ではないかとさへ考へるものだ

じつさい、今日の若いこれからの文壇に出ようとする作家や、詩人たちを見てゐると、その餘りにも理想のなさすぎる點が、私には何時も不滿に感じられる。理想がないから、生活に對して大膽さがなく、たゞ功利的に、ずるく、上手に立廻らうとする態度が見えすいてゐていけない

私が初めて文學を志した當時は無論時代が歐洲大戰直後の、日本へダダイズムの思想が入つて來た當時で、破壞的な激動

的な時代であつたが、あの頃はみんなが、もつと純眞で、もつと元氣だつたやうに思ふ。今から見ると、よくまああんなことが出來たと考へることだが、私など女のくせに交番の時計をはづしてお巡りさんに叱られ、それでも「詩人」だというと、さういふ亂暴な惡戲が笑つて許されてゐた詩や繪の展覽會をいたるところのカツヱーで開きみんなで集まつて唄ひ踊りなどした。

さういふ亂暴な生活が出來たのは今もいふやうに勿論時代的な風潮が支配してゐたに違ひないけれども、それでゐて私たちは、どこかに充たされない不滿や、不滿の底流に理想をもち、より生活的に擴充しようとする努力と勇氣とをもつてゐたやうに思ふ。今の若い文學青年が理想なく、生活に對する大膽さもなく、ただ功利的な考へばかり上手に立ちまはつてゐても、そこからは決して次代の文學などは生まれて來ないと思ふのである。

それについても、文學者の生活的な貧弱さといふことが、今日の作家に共通する一般的な問題として考へられる。東京だけにこびりついてゐる生活は私にとつては、たまらない。だから私は出來るだけ多く旅に出て、自分の身内にたまつて來る都會の滓のやうなものをふりすて、一方旅によつて、新らしい見聞や體驗をひろめ、それを文學に生かしたいと思つてゐる私がよく旅に出かけるのは、かういふわけである、本當に東京の生活が嫌ひになつて出來ることなら、靜かに田舍へ引込んでしまひたいと思ふとき、私はもう旅に出かけなければならなくなる、さうして、旅に出て私は又新らしい勇氣を得、ともかくもこのせち辛い社會に女だてらに立ちはだかつて文學に生きるといふことも出來るのである（了）〔「京城日報」昭和一一年七月一七日朝刊三面〕

森英一は『林芙美子の形成』（有精堂、平成四年五月一〇日）の「垣の内と外」で林芙美子の昭和一四年に書かれた「創作ノート」を引用しながら、当時の文壇に対する芙美子の考え方を次のように紹介している。少し長いが「創作ノート」の断片を挙げておく。

日本の文壇と云ふところは面白いところだ。何を規定として、純粋文学ときめるのかわからないけれど、婦人の雑誌に書いたものは何の反響もない。

私はこんなことも頃日考へてゐる。日本の若い作家に、一人としてフアビアンのやうな自由濶達なものゝ書ける作家が出て来ないのは、文学者の垣の中が、いやにせゝこましくお手々をつないでゐるのぢやないかと思ふ。

説明もいらなければ、党派もいらない。もつと若い作家がのび〳〵と孤独になれたら、いゝ作品がどん〳〵現れるのではないかと思ふ。

「大地」だつて、あれを日本の作家が発表してゐたら、日本の作家達は、あれを通俗小説とけなしてしまふに違ひないのだ。全く「大地」を読んでみると荒いタツチだし、王

竜が都へ出てからの、都の生活や、四囲の歴史がぼやけてゐる。それでも、あの小説はぐん〳〵人に読ませてゐるのだ。(4)

以上からも分るように芙美子は当時の文壇の「せゝこまし」さについて批判の気持ちを表している。当時の文壇は森英一も指摘しているように以前からの純文学と大衆文学との問題が背景になって、昭和九年一〇月号の「行動」には芙美子とも親交の深かった川端康成が「文芸時評」で文壇にある筈のない「垣」について発言をする。この「垣」についての議論は、昭和一〇年の横光利一の「純粋小説論」（「改造」昭和一〇年四月）などを経て、昭和一一年二月の「文学界」の「続私小説的文芸時評」までつづく。

今回の「京城日報」収録の「文学雑感」は「創作ノート」より三年程早い時期に書かれたものである。前述したような文学の「垣」をめぐる議論に対する考え方を芙美子は、早い時期から「外地」の新聞に披瀝していたことが確認できる。また、「外地」の新聞を通っての文壇批判の中にも最後は『放浪記』の作家らしく旅の話で締め括るのも忘れてはいない。年譜によると芙美子は昭和一一年五月に夫の緑敏と満州へ写生旅行に行き、同年一〇月まで滞在とあるがその旅行中、京城日報社から原稿の依頼があったのだろうか。

付録の評論と噂ばなしについて

最後に付録として林芙美子関連の記事を挙げておく。前述したように「京城日報」には林芙美子作以外の関連記事が二点見受けられる。合田謙一郎の「林芙美子の小説・雑感（文学の一意見書）」と「文壇噂ばなし」がそれである。合田謙一郎(5)という人の書いた「林芙美子の小説・雑感（文学の一意見書）」は昭和六年一二月二〇日と二二日の二回に渡って「京城日報」に掲載された。イデオロギーや「理論のため社会の人情を忘れ」たプロレタリア文学を批判しながら、それとは一線を画す理論を必要としない個性的な芙美子の今後の創作活動に期待をかけている。

昭和六年頃の芙美子は前年の「放浪記」の大ヒットのお蔭で、新進作家としては異例の正月から「朝日新聞」の夕刊を担当することになる。「春浅譜」（昭和六年一月五日～二月二五日）という連載小説を初めて新聞に掲載するが失敗作という評価をうける。しかし、同年の四月に「風琴と魚の町」（「改造」）、一一月には「清貧の書」（「改造」）を発表しまた世間の注目を浴びる。特に「清貧の書」は、かつて菊富士ホテルに閉じこもって創作活動をしていた際、芙美子が訪問したこともある宇野浩二からも好評を得る(6)。

このような林芙美子が自伝的な要素の強い作品から脱皮して、自然主義的な手法の客観的な写実小説を書くのは「牡蠣」（「中央公論」昭和一〇年九月）以降である。これは作家デビュー前

から親交のあった徳田秋声の影響とも言われている。徳田秋声との親交は次の「文壇噂ばなし」でもその様子を見ることができる。

「文壇噂ばなし」は林芙美子がフランスに旅立つ前のフランス語の勉強のことや送別会のことが綴られている。特に送別会について「文壇噂ばなし」では、「廿七日夜」と書いてあるが、昭和六年十月三一日の朝日新聞朝刊の「芙美子さん渡欧小話」では「廿八日夜レイン・ボーで開かれた」とある。

また、前述したように芙美子と徳田秋声の関係はよく知られているが、徳田秋声について芙美子は戦後「芸林閒歩」（東京出版、昭和二二年一一月一日）の「徳田秋声　人と文学」の特集号に「秋声先生」という文章を寄せている。その中で芙美子が初めて秋声に会ったのは大正一三年頃で、雑誌「文章倶楽部」に徳田秋声訪問記を書いて生活費を稼ぐためであったと述べている。それをきっかけにその後も林芙美子は秋声の家をたびたび訪ねている。それ以来徳田秋声とは「一度も小説を見てもらつた事はない」「特別の師弟関係」を続けていく。

【付録】

林芙美子の小説・雑感（文學の一意見書）（上）

合田謙一郎

意識的に認識化され、認識論的に意識化され、文學の自慰的藝術正統派のナンセンス化の行程、正統派の消費哲學化の文學、この文學的社會過程にあつて、在來の文學が未來に與する暗示は何であるか、何でなくてはならぬかは、勿論次の時代の精神に影響はするが果して現在の文學の暗示に忠實であるかどうかは、現在我々の見解を要としないであらうし、それは假想的展開に過ぎないであらう

勿論我々はプロ文學が社會改造の一端（彼等は全般といふ）を明示することにマルクスの辨證法的發展のあることも解る。但しこれが改造であつて、文學のアジプロの本質論の傾向を十分に持つとしても、文學の一部門とすることが出來るにしても、それを持つてし（ママ）て文學の全般とすることは、文學の發展を阻止すると云つてよいのであり、それを可能とする社會の狀態にあつて受理されつゝあるものだ

文學が斯く轉向するのも、その社會に一部の（彼等は全般とする）缺陷があるからであらうけれども然らば現在に到る文學の過程を、或は現の發展階段にまで前進した文學を余は意識的に取り入れず、過去を清算した文學の進出としてプロ文學を受け入れてよいか？

我々は文學は人間の靈肉の象徵化的展開であつた時代を知る、又文學はそれに對する爭闘であり、その社會狀態のインスピレイシヨンであつた。現在のプロ文學の形體は、その社會、國際的な階級の貧困を經濟恐慌のしからしむるものとなし、或はその辨證法的唯物史論の發展とその法則に於て、それの結果的歸結點としての政治的要求となつて、階級の對立、その不可避的な爭闘をアジ・（ママ）プロせんとしつゝあるのだ。それの公式的な問題、理論によつて文學の形體とするのである。我々はそ

の文學に理論を知り、人間の可憐なその社會内においての有機的な生活を忘れしめんとする、換言すれば、文學が我々に理論を（ママ）を教へんとするといふことになるのだ

それはそれとして、林芙美子女史の著作より得た最近の感想、女史の持つ特質、私に映じたものを語つて見よう

既に女史の半生はあらゆる雜誌その小説によつて見られる如く、日本のルンペン、ルンペンの一歩手前の世界、社會を歩いたといふことに異論なく、又そうであつた女史の小説に接觸することは興味であり、見ざる社會への眼である

女史の批判書は見ないが、私としては、女史は階級的認識の手前にあつて、自己の進んで來た清貧の藝術に忠實であるといふことを知るのである。女史の文學には高氣がない。といふのは現在までの文學（プロ文學をのぞいての）には何か知ら高氣、藝術を藝術化したといつたようなものがあつたのである。その高氣が感じられない社會に對するリアルな把握、その詩は清貧を笑ふことがあつても、捨てゝしまわない、あの忠實さが露骨に、がつちりと把握されてある

私は最近プロレタリヤ文學に對してマルクス主義的に高踏的な感が深くされた。理論に壓迫されてゐる、理論のため社會の人情を忘れ果てた姿、生に關して死を數へてゐるやうな姿を見始めた。そして又今はつく〴〵十一谷氏がかつていつた「流行に媚びる文學」であり「人のための文學ならばなしよからん」の芭蕉の言葉を思ひ出す

放浪記を讀み續放浪記を讀み、「彼女の履歴」等に及んで女史の持つ鬱憤（？）が始めて解り始めた

女史には人間の本能がある。浮び上らうとするあの焦燥に似た本能がある。そのために女史の文學は貧の階級に妥協しなかつた

その焦燥的な本能、それは更に現實のプロ文學がアジるところの妥協、勞働者の團結を容易にすることが出來てゐるのであり、更に現實の不況と失業者の氾濫は、浮かびあがらうとする本能を爭闘に容易に轉化せしめ得らるゝのだ、女史がその中に捲き込まれたならば我々は女史のこの理（ママ）實にあつての偉大な（？）特異性を發見することは出來なかつたであらう

空腹を抱いて泣く、泣くことによつて新たらしい現實の視野を求めた、この力が女史の小説に力を與へてゐる、女史の空腹の詩は、リアルな飽くこともない生であるそして又理論によつて割り切れるものでない、あの曲つた空腹の背すじと腹の皮の合致するところにアジ以上の何ものかを與へてゐるのだ

女史をアナキストだと呼ぶ、けれども私はそんな主義に結びつけて解釋したくない、女史の現實の生活狀態からして、そう云ふのであるならばイゴイストでさへある何故なら女史は階級爭闘の闘士として轉化しなければならない（プロ文學者の說から）可能性があるからだ〔「京城日報」昭和六年一二月二〇日朝刊八面〕

（下）

女史の文學における階級は、要求でもなくアジ・（ママ）プロでも

ない。それは現實が如何に女史のあつた階級を腐敗させ、苦しめてゐるかその中にあつて、かくの如く戰つて來た人間（女史自身のこと）世の女性があることを明かにしてゐるといふことのやうに私は考へてゐる

放浪記の如き、あの詩は理論ある著者によつて出來得るものでない。岩藤雪夫（ママ）天の作が、徳永直の作がアジテーシヨンに於て、政治的關心の問題にあつて、勞働者、貧者階級に大きな爭闘の自覺を與へてゐるにせよ、それは數理的な問題に過ぎない。それは文學藝術を借りた理論である。その小説の人物が行動する理論の善惡（階級的良心の）の討議場としての小説なのだ。生活の不安は爭闘によつて慰められてゐる。それだけの文學なのだ。そこにある戀愛は數字的であり、賣淫は、形の變つた意識であり、意味であり認識させんとする努力であり、燃え上る（？）苦痛のやり場の明示である

ゴーストツプの如きもパツ〳〵と火を燃えあげさせる鍛冶場のフイゴを押してゐるやうなものだ。たゞ惡人は警察であり刑事であり資本家でありそれが持つてゐる政治■なのである。これだけで吾々はこの文學に組し、この文學の未來性を確立して明るくされ得るか果して勞働者が其闘爭にのみ自己を生かす道だと盲目的にも思はしめることが出來るだらうか？人間はさう出來てゐるのか、私はこの社會の現實に直面する貧者の行動がかくならずばならずと知らされたものだが、文學がそれだけの機械であることには贊し得ないものだ

ゴーストツプを持ち出したついでにもつとこの作品を見て見ようプロ文學の大衆化の一端を完成したと云はれた作品であるが叉反面には俗惡な急速なテンポ、書き切れないものを書きつくそうとして焦燥に似たもの概念的な事件の取扱ひ方等々が厭に眼につく。そしてまたいやに氣取つて書かれてある

それは腐つた魚を持ち出して大衆の眼前にさらけ出し、我々の文學はと、その魚の價値を市場の賣買業者の不注意からして腐敗せしめたものゝ如く云ひふらしてゐると云つたところがある。魚の腐敗する原因は語らない。換言すれば、勞働者、マルクス主義の理想家は斯くまでマルクス學を宗教的に信じた行動を見よと云つてゐるものだ。貴司山治にとつてはマルクスは宗教的な信念によつてそれを信じ、さうなることに超人的な（？）氣持でゐるのかも知れないが、文學は理論の超人的態度を必要としない。必要があつたにしても理論はかくれたる精神である。それは大衆の心臓を射ても、讀むだけに止められるものでない。讀ましめるものは、人情であり、環境による人間の微妙な動き、働きによる外はない。それが缺けてゐるといふことが出來る

ゴーストツプの空腹をかゝへた人間は、一樣に爭闘を覺悟する人間、それ以外にないやうな爭議、運動のための傀儡がうめいてゐるだけだが、林芙美子の空腹を感じた人間は、全々姿が違ふ、そこに文學としての本質的な相違がある後者の文學に光がある

空腹に直面する人間が空腹をまづみたすために爭闘を意識するだらうか、まづ空腹を充すための勞働…何んなことがあつて

も、ものごひをしても空腹を充さなければならないあの眞劍な本能を感じるそれはかならず人をうつ、その場合に爭闘心ばかり湧き返るやうな空腹の眞理はあり得ない。食はずに生きられる人間ならともかくだ

所謂、人間の眞實、現に直面する空腹の克服、生命の本能といふものがあるのだ。これはイデオロギーによつて生かすことは出來ない。林芙美子女史の力のこもつたものを感じさせずには置かないのはこゝにあるのだと思ふ。とにかく藝術の眞と藝術化の型との相違があるのだ

藝術を意識化の理論過程とするところに、藝術の空地を感じ、意識を藝術化するところに意識と藝術の空地を感じる

「人のための文學ならばなしよからん」

その通りだ、空地がありながらも作りいゝのだ。苦心がなく出來上るといふのだ。個性もなく、（個性は彼等にとつて必要ではないのだが）そのためにプロ文學はマルクスのお供を迎へ道具としかならない

自分のための文學、人のための文學、理想のための文學、理論の文學、自然の文學——

然し「ために」する文學に「ため」ならざるはない。「ため」であれば「ため」が眼立つ。ためでなければならない「ため」のための文學を要求するのだ

私は林芙美子女史の文學に就て十分の批判は出來ない、今後の女史が何う轉向するか、然しながら女史の轉向は中條百合子女史の「すらかつた信吉」のやうな概觀の藝術ではないであらう、林史がプロ文學にあ新しい方向を與へるのではないかと思ふのだ 女が林女史の文學は今尚自然主義的な色彩があるやうだ、リアルなローマンチイズムと云ふやうなもの、腔腹の戀愛そんなものがあるのもまぬがれない〔「京城日報」昭和六年一二月一二日朝刊八面〕

文壇噂ばなし

「放浪記」の續きをやりにフランスに行つた林芙美子氏は、流石に奇談逸話の自傳專門に賣り出したゞけあつてその豐富さは正に驚くばかり、本人のいふところ世間でいふところ悉く眞僞人亂れて讀むものを呆然たらしめる。

◇

しかし、ことの正否、眞僞はどうあらうともすべてこれ宣傳の世の中なれば、芙美子氏の如く、まさに打つてつけの商品價値を有する現代向き文士といふべきであつて當人夙にこの點を御承知で……何が何だつて好いぢやないですかと口癖のやうにいつてゐる。

けれども如何に何が何でも構はんといつたところで、フランスに行く以上、片言なりとフランス語が出來ねばなるまい、と發心して八月頃から御亭主手塚君の友人の內海といふ人のところへフランス語の勉強に通つた

◇

その內海君といふ人がまた畫家であるがまだ一枚の繪を展覽

會に出したこともなく、フランスに繪の修業には行つたが、一枚も描いたものを持つて來ず、只々モンパルナスで踊り子と遊ぶことだけをおぼえて來たといふ金持ちの若君だけにどうもフランス語を教へるなんてことは柄に合はない。

◇

はじめのうちこそアー、ベー、セー、とやりはやつたが、内海君が片時も酒杯を離せぬ呑んべいで、教はる芙美子氏もいける口とてつい一杯つてことはなつて了ひ、醉つ拂つて家に歸るが関の山。たう〳〵十一月一日の出帆までに「トレ・ビヤン」も覺へず「何んだつていゝわ」で諦めて出掛けて了つた。

◇

その内海君が一描がゝざる畫家である様に、芙美子氏の御亭主手塚君も友達の義理合ひからか、一向にパツとしない畫家である。が彼女の近作「清貧の書」にもある通り非常に面白い性格の男で、呑ん氣で利巧であまり細君の行動に立ち入らない、それが長く二人が一緒にをられる理由でもあらう。

◇

二人がそも〳〵一緒になる動機からして頗る振つてゐる。當時芙美子氏は寢る所もなく一知人の下宿に轉がり込んでゐたが、矢張その下宿にゐた別の男に深夜忍び寄られ逃げ込んだのが隣室にゐた手塚君の部屋。來る者は拒まず、とばかり抱いたのが初まりであつた

◇

だがある人人の説によると忍び寄られたなんて嘘で、と稱してかねて目星をつけておいた手塚君の所へもぐり込んだものだといふ果して眞僞は如何？

◇

來る者を拒まぬ手塚君、芙美子氏がフランスに去るとも別に愛惜の様子もなく廿七日夜芙美子氏の渡佛送別會がレインボーグリルであつた際も、一番別れを惜んだのは呑み友達であり昔からのパトロンであつた辻潤と特別の師弟關係（？）ある徳田秋聲老であつたとのこと。〔「京城日報」昭和六年一一月二一日朝刊六面〕

【注記】

1　引用は『林芙美子全集　第一六巻』（文泉堂出版株式会社、昭和五二年四月二〇日発行）の年譜に依った。

2　十一谷義三郎は「文芸時評　三」（「東京朝日新聞」昭和七年一一月四日）で「小区」について「女ごころに潜む「善き古さ」を、縦から横から眺めて、その味を、雨に、花に、犬に、小区居住者の景物的展望にまでゆきわたらせた佳作」だと評価しながら、「作家的捨身の開眼の道程をだどらうとするやう見える」と述べている。

3　但し、昭和女子大学近代文学研究書発行の『近代文学研究叢書』（第六九巻、平成七年三月二〇日）にはその書誌情報が記載されている。

4　『林芙美子長篇小説集第六巻』（中央公論社、昭和一四年二月）

5　合田謙一郎という人物については『新聞人名辞典』（日本図書センター、昭和六三年二月）や『日本人物情報大系』（皓星社、平成一一年七月～平成一三年一月）、また当時の『新聞総覧』などを参照したがその詳細につ

いては未だ定かではない。

6　宇野浩二は「雑誌文学の眺望（二）」（「読売新聞」昭和六年一一月五日）で当月に発行された雑誌の小説の中で一番面白かったと褒めながら、作者の芙美子が「左翼か右翼か知らないが」、彼女の小説を初めて読んで「或る新しい小説を見出したといふ喜び」を表している。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年）